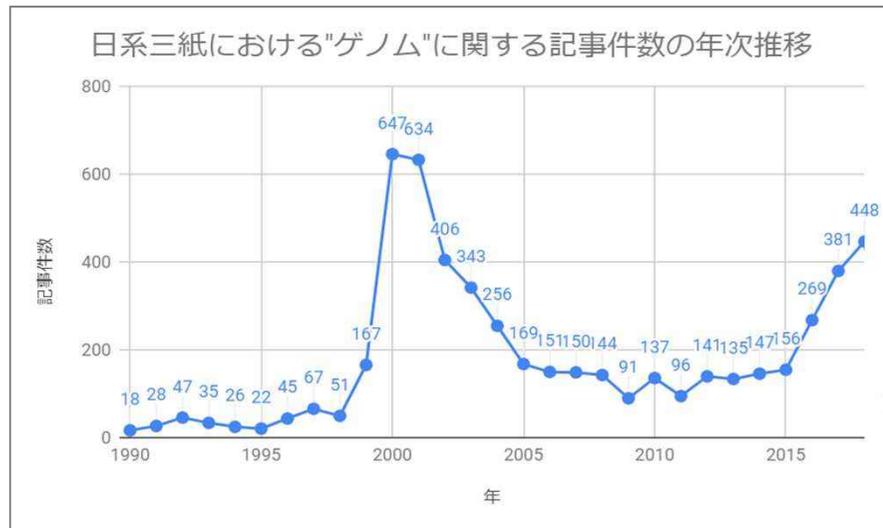


「ソーシャルリスニング」予備的調査 概要

- 報道分析の対象として、「ゲノム」「再生医療」「遺伝子組換え」のテーマを対象とした。これらについて、国内3紙(朝日新聞、読売新聞、毎日新聞)、海外4紙(The Guardian、New York Times、Washington Post、The Wall Street Journal)の分析を実施した。概要では、ゲノムの例を取り上げた。
- 「ゲノム」に関する記事は、1990年代は少ない記事数で推移し、1999年から急激に増加して2000年にピークに達した。また、2000年代中ごろから2010年代中頃までは同程度で推移し、2016年頃から再度増加した。この傾向に基づき、1990年～2019年1月までを、I期:1990年～1998年、II期:1999年～2004年、III期:2005年～2015年、IV期:2016年～2019年の4期に分類した。
- 特徴語の傾向から、各期の報道状況を次のように分析した。
 - I期:1990年にヒトゲノム計画が開始された後、年次毎に報道件数が増加した。特に1997年には「ヒトゲノムと人権に関する世界宣言」の採択(ユネスコ)が行われ、記事数が前年に比べ増加したほか、「計画」「ヒト」「地図」など、ゲノムに関する研究の基礎的な内容が報道されたものと推察された。
 - II期:2001年にヒトゲノムドラフトシーケンスの解析が終了し、2003年にヒトゲノム計画が完了したことから、その成果について各紙が報道を行ったことが推察された。また、この時期には、国内及び海外においてヒトゲノムに関する指針や宣言が発表されており、「情報」の語には、ヒトゲノムの活用に関する倫理的側面の報道が含まれていたことが考えられた。
 - III期:2014年に20万人分のSNP(遺伝子多型)解析が完了するなどゲノム解析の結果を活用した研究が盛んにおこなわれ、研究成果や研究の進展が発表された時期であることが報道分析からも読み取れた。
 - IV期:2012年に開発されたCRISPR-Cas9を用いたゲノム編集技術が活用されたほか、中国のゲノム編集ベビーの報道が多く行われ、ゲノム編集が身近な技術や課題として報道された時期であることが推察された。



I期～IV期の各特徴語の上位10件

	I期(1990~1998)	II期(1999~2004)	III期(2005~2015)	IV期(2016~2019)			
計画	0.135	ヒトゲノム	0.428	ゲノム	0.303	ゲノム編集	0.45
染色体	0.121	情報	0.32	科学	0.263	変更	0.32
遺伝	0.11	解読	0.304	教授	0.239	治療	0.234
ヒト	0.108	遺伝情報	0.301	遺伝情報	0.208	技術	0.233
地図	0.108	開発	0.295	発表	0.201	遺伝子	0.222
人間	0.108	企業	0.292	研究所	0.18	医療	0.216
全	0.098	日本	0.289	センター	0.172	研究	0.202
東大	0.096	世界	0.26	チーム	0.168	患者	0.189
生命	0.096	人間	0.254	細胞	0.187	受精卵	0.178
DNA	0.095	解析	0.251	DNA	0.149	細胞	0.178

本資料は、国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターからの委託により、株式会社三菱総合研究所が調査を行った結果をまとめたものです。

本資料においては、調査によって得られた情報に関して考察を加えていますが、あくまで限定された視点に基づく一考察であり、必ずしも国立研究開発法人科学技術振興機構、社会技術研究開発センターおよび委託先の公式見解を示すものではありません。

また、本資料の掲載情報を利用して受けた一切の損害について、国立研究開発法人科学技術振興機構、社会技術研究開発センターおよび委託先は何ら責任を負うものではありません。